

定の防衛機制をとりきれず、刺激をただ回避することで自己の安定を保とうとしていることを表わしている。このことは量的分析でも述べたように、人格構造の未分化さ、未熟さと関連があると考えられる。

6) 急性アルコール幻覚症の1例

藤田 菜生・富樫 俊二 (新潟大学精神科)
飯田 眞

アルコール幻覚症は、その発生機転及び疾病論的位置づけ、特に分裂病との関連に於て古くから議論の多い特異な病態である。今回急性アルコール幻覚症の典型例と考えられる一例を経験したので報告し、分裂病との鑑別の観点から若干考察する。

〔症例〕症例Mは34才男性で十数年来の大酒家であり、今回初めて幻覚妄想状態を呈した。

家族歴) 実父・養父共に大酒家である。母は一家の大黒柱で、Mに対し過干渉傾向がある。Mの両親は、Mが3才時離婚し、以後、養父、母、姉、Mの4人家族。

生活史) MはS28年、新潟に出生した。Mが3才時より18才時迄、一家は札幌で暮したがMの高校卒業を前に夜逃げ同然で新潟に戻った。Mはまもなく単身上京し、某新聞社準社員となった。29才時、人員整理が近づくと自ら退職し、職を転々とした後、31才時より無職でいた。それ迄小遣いを送っていた母に無職である事を知られ、帰郷させられたが、その後発症迄の2年間も無職のままであった。Mの酒量は増え毎日日本酒にして一升程のアルコールを摂取していた。

性格) 自己不確か性が高く、現実回避傾向、自己本位な点特徴といえる。Ror. では Psychotic sign は認められない。

現病歴) MはS62年(34才時)春頃より求職活動をする為、昼間は節酒するように努めたがままならなかった。春頃Mは階下に住んでいる従姉夫妻の娘の下着を盗んだ。7月初めより強い不眠が出現した。又、下着泥棒のことでMを処分しようと相談する従姉夫婦の声が聞こえた。さらに外出時、私服警官に追跡されているような気がし、彼らの相談する声やスピーカーでMに呼びかける声が聞こえたという。警察に駆け込んだり、盗聴器を捜す等の異常行動が出現した為、母に連れられて当科初診、即日入院となった。異常体験の出現から入院まで10日間であった。

入院後経過) ハロペリドール1日3mg投与した。入院後は幻聴は認められず、妄想も疎隔化していった。その為入院2週間後より抗不安薬のみの投与としたが、3ヶ

月経過し退院した現在も症状の再燃はみられていない。

〔考察〕スラヴィッツ(1980)による本症と分裂病との鑑別点を参考に、本症例の診断に際してもまず分裂病を除外した。

又本症例を、分裂病との移行の観点からの齊藤(1985)による分類に照合し、急性アルコール幻覚症典型例と診断した。

しかしながら、本症の慢性化例の中には分裂病と鑑別し難い症例や、発症状況に着目すると種々の精神病がアルコールの修飾をうけて発現してきたと考えられる例もある。このような中でアルコール幻覚症の診断を進めていく為には、細分類しそれに照合することも重要だが、上掲の各点を中心に、様々の角度から詳細な検討を重ねることが必要であろう。

7) 非定型精神病像を呈した一卵性双生児不一致例

中村 秀美・富樫 俊二 (新潟大学精神科)
飯田 眞
小川 正裕 (新潟信愛病院)
橋 玲子 (新潟大学保健管理センター)

非定型精神病像を呈した当時27歳男子の一卵性双生児不一致例について発達史、生活史の双生児間の比較を中心に検討した。病像を呈したのは双子の兄Aであり以下弟をBと呼ぶ。卵性診断で一卵性双生児と判定されている。双子の父はうつ病の既応があり母には幻覚妄想を主体とした非定型精神病の既応がある。乳児期双子はBがAより劣っていたため母の愛情はBにより多がれていた。一才以降双子は父方の祖母の養護のもとに置かれたがその祖母の目にはAが「優しく素直な子。」Bは「口答えする我がままな子。」として写っており幼児期よりBはAよりやや我がままに自己を表出していたことが伺えた。更に思春期に至ってBはAに比し友人との係わりの上でより対人的な外向性を発達させていった。また生活環境の上でも高校卒業を境に双子に大きな相違が認められた。高校卒業時BはAより成績で劣りながらも進学という欲求を認められ家から離れたがAは長男という役割から進学という欲求を自ら抑圧し家に留まり就職した。

双子は内気で神経質という共通した性格構造を有しているものの発達史からBはAに比し自己表出や対人外向性の面でより成熟していることが明らかとなった。

AはBが家を離れた後2回発病している。いずれの病像も躁病様の観念奔逸性錯乱、易刺激性、誇大妄想が主体であったが初回病像には短期間の幻聴、幻視、被害妄

想も認められた。Aは人格変化等認められず完全寛解していることから非定型精神病と診断した。

母の病像とAの病像は類似しており双子は共に精神病の遺伝負因を有している可能性があるが本症例が不一致であることからAが発病に至るまでの経過を発達史、生活史の上でBと対比し考察した。

Aは性格発達の段階で、(1)母の受容不足、(2)長男としての役割の負荷、が性格を形作る要因として働き、Bのように自己表出や対人外向性を獲得することができなかったと推測される。また長男であるが故に、(3)家の内(A)→家の外(B)、という環境の相違が生じAは再三自己の欲求を抑圧することで最終的に破綻し発病に至ったものと考えられる。以上のように(1)(2)(3)の要因が不一致の原因として関与していることが示された。

更に発病機転において、Aが家を離れようとすることに對する家族の非難や目の当りにした母の発病がAに影響を及ぼしているものと考えられ、双子の発達史、生活史の相違に加え、祖母を含めた家族全体の病理性もまた本症例の不一致に関与しているものと考えられる。

8) 躁うつ病の一卵性双生児の一致例

片岡 邦彦・大橋 正和 (新潟大学精神科)
飯田 眞

我々の双生児の症例では、共に躁うつ病を発症した点では一致しているが、両者の経過の違いを、病前性格との関係に焦点をあてて考察する。症例は、昭和24年6月5日生の男性で、兄の方をA、弟の方をBと呼ぶことにする。家族歴；父37才母29才の時、その第1子第2子として生まれた。父は現在75才で農業に従事し、物静かで友人は少ない。母は循環気質である。生活史と現病歴；A B共に満期出産。出生時体重はA B共に1750g 前後でBの方がやや重く、生後Bの方が活潑で歩行開始もBの方が早かった。養育者は母で、少年期2人は何事も一緒に行動したが、Bが常に指導的役割を果たした。高校はBが全日制商業高校、Aは農家の跡取りを期待され定時制農業高校に入学した。両者は性格的には内気であるが人付き合いも悪くはない。Bの方がより社会的であった。Aは高卒後農業に従事したが、24才時稲刈後、不眠抑うつ感が現われ、28才時Bの結納決定後再び不眠胸部苦悶感が現われた。その後33才と36才にうつ状態となったが現在寛解状態にある。Bは21才時転勤後抑うつ状態が3ヶ月間続いた後、2ヶ月間躁状態となった。24才時転勤後うつ状態となったが、以降35才まで大きなエピソード

はなかった。35才時会社経営が傾き、重大な責任を感じ、より一層仕事に打込んだ後躁状態が現われ精神科入院となった。3ヶ月後うつ状態に変わり抗うつ薬の投与を受けた。半年後再び多弁多動が出現したため入院となった。退院後2週間の寛解期を経た後、現在まで不眠を主訴とするうつ状態が続いている。

考察；2人に共通する性格は、対人関係を重視する循環性格であるが、その後Aはメランコリー型性格を進展させ、Bはマニー型性格を顕わにした。この違いが両者の経過に影響を及ぼしていると考えられる。Aは2回のうつ病相が稲刈後、1回は田植前に現われている。つまり稲刈後の荷下ろしと、農閑期を迎えて新しい仕事を探すという課題との板挟みの状況下で発病した。マニー型性格を示しているBは、初回は転勤後うつ状態を示し、その後躁転し、更に次の転勤直後にもうつ状態を示している。これら生活上の変化がうつ病の発症状況となっている。マニー型の人一般に生活空間が狭隘化し葛藤に満ち、彼らの支配性万能性が許容されない状況で、生命の流れが停滞すると危機的になるが、Bの躁病相はまさに倒産というマニー型性格が機能しない状況下で発病している。2回目は軽うつ状態のため抗うつ薬を服用していた事も考慮すべきである。

まとめ；一卵性双生児の一致例を報告したが、Aはうつ病相のみを繰り返し、Bは躁うつ病を発症している。この違いは両者の性格の違いに求めうる。循環性格の上にAではメランコリー型を、Bではマニー型性格を進展させ、発症状況としてはいずれも負荷状況が認められた。なお病前性格の発達史については今後の課題としたい。

9) 抗てんかん薬のモニタリング(第4報) —血清分離剤の抗てんかん薬に及ぼす影響—

阿部 雅典・三宅 章 (田宮病院)
齊藤 健利・田宮 崇

現在、社会的な問題となっているB型肝炎などの院内感染を防止するために、あるいは検査の迅速化に対応するために血清分離剤入り採血管が多く使用されてきている。

今回我々は、当院の採血方法の見直しのために、分離剤入り採血管を検討する機会を得ることができ、血清分離剤の抗てんかん薬に及ぼす影響について2・3の知見を得たので報告する。

実験に使用した材料は、分離剤入り採血管でパキュテイナー、オートセップ、インセバック、セラボーL10、クロットチューブA、そしてブンリメートNの6種類で